

私を迎えてくれた博多

前原市 田中 恵美子

出港の合図の銅鑼がひとしきり騒がしく鳴り響いた。やがて銅鑼の音が止み、船がゆらりと岸壁を離れたのが体に感じられた。甲板に出て、この瞬間を固唾をのんで待っていた何百人もの人々の口から期せずして、「おう、」というどよめきが起った。我が子の骨、親兄弟の骨を広野に曝したまま帰る人、営々と築き上げた全財産を彼の地に遺して引揚げる人、王道楽土と謳われた大陸に賭けた夢を打ち砕かれた人、皆それぞれの悲しみにじっと耐えて、次第に遠去かる中国を見詰めていた。

昭和21年9月下旬、私が壺蘆島から乗り込んだ引揚船はアメリカの輸送船V002、日本上陸地は九州の博多。子供の頃、一家で海水浴に行った百道や志賀島のある所、同じ県内の久留米市出身の私にとってこんな嬉しいことがあるだろうか。

私が久留米を離れて満州（現在、中国東北地方）へ渡ったのは昭和20年7月下旬。先にサイパンが玉砕し、沖縄が焦土と化して、『いよいよ今度は本土決戦だ』、と国民は悲壮な覚悟をしていた。九州ではいつ、どこから艦砲射撃を受けるかが専ら噂の焦点になっていた。その頃の野菜の配給は10数件の隣組に対して南瓜4分の1の一切れ。西鉄久留米駅で、兵役を過ぎた初老の男の人達が空の1升瓶5、6本をリュックに詰めて福岡行の電車に乗るのをよく見かけた。博多の海に汐水を汲みに行くのである。それを気長に煮詰めて調味料の塩を採るのであるが、海水を煮詰めるだけの燃料を手に入れるのは容易ではなかった。

そんな内地から長春に来た私が一番驚いたのは、食糧と物資の豊富なことだった。果物屋の店先には青林檎が山積みにしてあり、食卓のキャベツや胡瓜の緑が目には沁みた。けれども満州の平和も8月8日までだった。私は長春に着いて10日目にソ連軍の侵攻を受け、半月後に日本は無条件降伏した。一緒にラジオで日本からの終戦の玉音放送を聞いた人は、私が久留米出身と知って『8月に入って久留米は空襲を受け焼野ヶ原になった』とラジオが言っていたと教えてくれた。私の頭はバネが弾け飛んだように動きが止まってしまった。父や母は？、弟や妹達は？、祖国は戦争に敗れた。自分はソ連軍に追われて明日の命の保証もない。八方塞がりの中で唯一つ心に誓ったことは、何としてでも生き抜いて久留米に帰り、家族の安否を確かめなければならないということだった。

あれから1年余、私を乗せた引揚船は無事博多埠頭に横付けになった。初秋の博多の海は穏やかに温かく私を迎えてくれた。甲板から見下ろすと、白い細長い魚の群が船の廻りをゆったりと回遊していた。あれはサヨリだろうか、カマスだろうか。人間世界の出来事とは無縁に、悠揚と泳ぐ魚の姿に難民生活で荒れずさんだ心が一瞬和らいだ。長春を出てから33日目、遂に博多に上陸した。しかし直ぐには解散にならず、種々の手続きのために2、3日宿舎に止め置かれた。ある日附近を散策していると、松林の奥にひっそりと荒板と簷戸で急拵えした建物を目にした。簷戸の入口には、こういう主旨の立札が立っていた。『外地で外国兵、その他の暴力によってあなたが妊娠したとしてもそれは決してあなたの恥ではありません。ここで忌わ

しい過去を精算して新しい人生を始めて下さい。費用は無料です』。私はこの立札を読みながら涙が流れて仕方がなかった。あの満州で、一体どれだけの日本人女性がソ連兵の餌食になったことだろう。これを阻止しようとした日本人男性は容赦なく射殺された。私自身は『よくもあの事態を切り抜けられたものだ』と思うような事が何度もあった。ソ連兵が銃の台尻で扉をたたき破って室内にはいつてきた時、しっかりと目張りした二重窓に体当たりして足袋はだしのまま、零下20度の屋外に逃れ出たこともある。地下の石炭倉庫に身を潜めて息もできないほどふるえながら、頭上でソ連兵が何か怒鳴って荒々しく歩き廻る靴音を聞いていたこともある。私は強運に恵まれて今日まで事なきを得たが、不幸にもそうではなかった人達を誰が責められよう。

在満州邦人は一旦緩急ある際は関東軍が自分達を守ってくれるものと信じ切っていた。その関東軍が在満州邦人を置き去りにした。私がそれに気付いたのは8月12日、中央銀行に避難する時である。広い大道は行き交う人も疎らで、軍隊の姿はおろか緊迫した空気すら感じられなかった。私の出身地久留米は第12師団の所在地、軍隊が醸し出す雰囲気、物々しさは子供の時から熟知している。この危急存亡の秋（とき）にソ連軍を迎え撃つ気配はまるでなかった。辛うじて軍隊らしきものといえば、所々の街路樹の根方に機関銃一挺を据えて、2、3人の兵隊が手持ち無沙汰に通行人を眺めているきりだった。これがいやしくも一国の首都を守る戦闘態勢なのか！。私はハッとして立ち竦んだ。関東軍は我々を棄てた！！。そう直感した刹那、体の表面は灼熱の太陽に照りつけられて火のように燃えているのに、体の芯は氷のように冷めたく凍りついていった。何の武器も持たず戦う術も知らない一般邦人は、攻めてくるソ連軍の矢面に立たされたのだ。

進駐してきたソ連軍の凶暴さは言語に絶するものがあつた。兵隊の侵入を防ぐために窓という窓、戸という戸にはベニヤ板と鉄板を何枚も打ちつけた。部屋の中は真っ暗になった。燐寸の光で時計を見ても、8時というのが朝の8時なのか夜の8時なのか分からなかった。家財道具を掠奪されれば取られ損、殺されれば殺され損、どんな目に遭わされても、訴える所もなければ保護してくれる所もない。敗戦国の民として日本人は虫けら同然の生活を送った。ソ連軍が長春から撤退したのは21年3月末。日本人は手を取り合って喜んだ。その喜びも束の間、4月中旬に蒋介石の国府軍と毛沢東の八路軍との長春争奪の攻防戦が展開された。その頃私は壊血病で40度の高熱が続いていた。隣接のホテルの屋上に、国府軍が迫撃砲を備えて兵士達が動き回るのが寝ている部屋の窓越しに見えた。八路軍の砲撃が始まると凄惨な震動が起こった。私は敷布団と畳ごと、ガッと持ち上げてドサッと落とされた。天井の壁土がザザーッと掛布団の上に崩れてきた。数時間後砲撃が止んだ時には、掛布団の上に積った土の重みで身動きもできなかった。高熱に喘ぎながら、土に埋まりながらも私は生き通した。そして身装（みなり）もボロボロ、心もボロボロになって、やっと博多に辿り着いたのである。小学校3年生の時に勃発した満州事変は、上海事変、日華事変と拡大していった。戦争の拡大と共に成長した私は、青春の真っ只中にアメリカとの戦争、ソ連との戦争の2つの劫火をくぐり抜けた。戦争の始めから終わりまでを、具さに見極めた私の半生である。